

【一般入試 編】英語外部試験の入試利用 導入状況を徹底調査！

一般入試での利用は今後、急激に拡大！

旺文社 教育情報センター 28 年 5 月 27 日

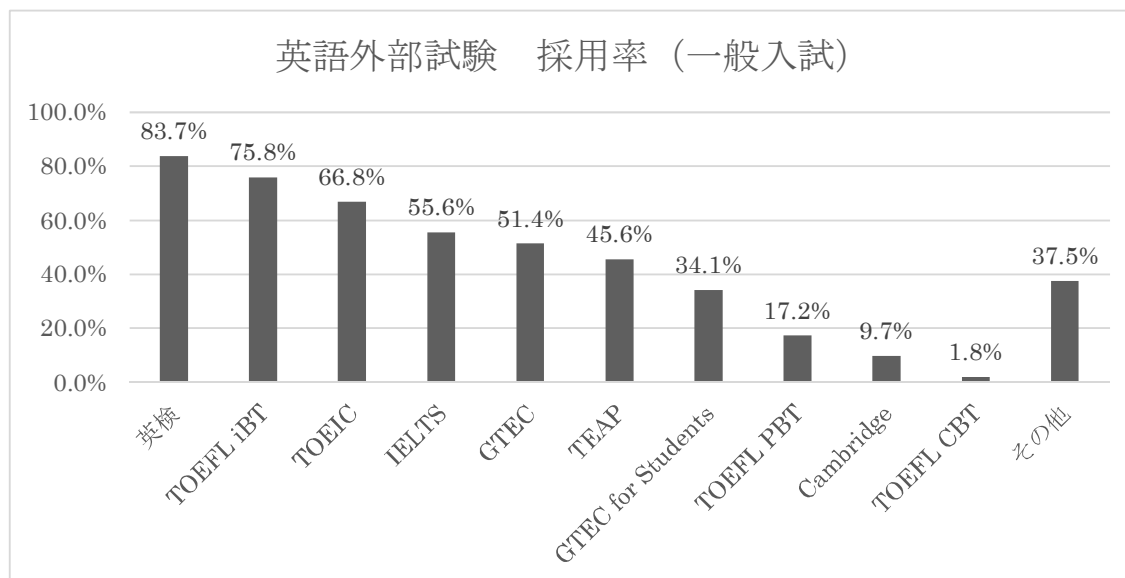
前回【推薦・A0 編】をまとめた英語外部試験の入試利用だが、今回は【一般入試編】としてその利用方法に注目した。

今春実施した 2016 年度一般入試で英語外部試験を利用した大学は、国公私立大合計で 50 大学、全 746 大学の 6.7%。設置者別では国公立大 9 大学 5.4%、私立大 41 大学 7.1%となる。推薦・A0 (271 大学 36%) と比べるとまだ少数だが、一般入試での英語外部試験の利用が広がり始めて、昨年度入試はまだ実質 2 年目と言える。現在、文部科学省では学校教育と大学入試の両面から英語の 4 技能化を進めており、今後、一般入試での英語外部試験の利用が急激に拡大していくのは間違いない。

なお【推薦・A0 編】については以下を参照されたい。

http://eic.obunsha.co.jp/pdf/exam_info/2016/0404_2.pdf

●英語外部試験利用の状況



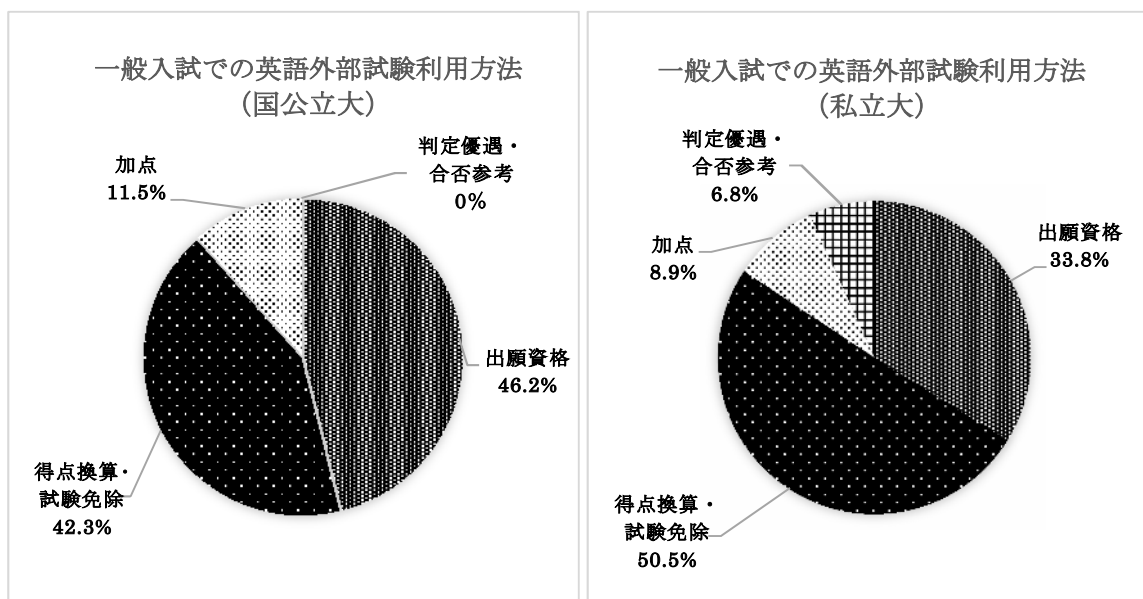
※各大学にて英語外部試験を利用している入試方式 (一般入試) 全体を 100 とし、それぞれの試験が採用されている割合を算出。
※試験の採用については募集要項に明記されている試験全てを計上した。「それに準ずる試験でも出願可」などの記載がある場合には上記全ての試験が採用されているとしてカウントしている。募集要項の文面から記載試験以外は無効と読み取れない場合には採用としない。

上のグラフは 2016 年度の一般入試で英語外部試験を利用した 50 大学における各試験の採用率をまとめたもの。

「英検」が高い割合で採用されているのは推薦・AOと同様、学習指導要領に沿った出題内容・レベル設定が日本の高校と大学で広く認知されている表れと言える。大学入試で利用する以上、高校での学習を反映する試験が最適なのは当然だ。それに続く「TOEFL」、「TOEIC」は順位こそ入れ替わっているが、推薦・AOと同じ結果であった。

ここで注目したいのが「IELTS」と「TEAP」の採用率だ。推薦・AOでの「IELTS」35.1%、「TEAP」15.2%に比べ、一般入試ではそれぞれ55.6%、45.6%と、採用率が非常に高くなっている。これは一般入試で英語外部試験を利用する場合、正確な試験結果に加えて厳正公平な受験環境、結果証明発行の安全性などが高いレベルで求められているのが理由であると考えられる。受験者の自宅PCを使ったCBT受験（コンピュータを利用した受験）等は、試験会場へ出向く必要がなく、いつでも試験を受けることができるなど利便性が高い反面、受験者本人の認証やカンニング防止など、解決すべき課題があることは確かだ。「IELTS」と「TEAP」が一般入試で採用率を上げてきているのは、各試験会場での厳しい本人確認、公平な受験環境の提供など、試験運営全体の信頼性が評価されていることが大きな要因と思われる。

●国公立大・私立大でも「得点換算・試験免除」での利用が最多



※それぞれの入試で英語外部試験を利用している大学（国公立=9大学、私立=41大学）の中での割合。

※各項目の例 【出願資格】「英検2級以上を出願要件とする」など。

【得点換算・試験免除】「英検準1級以上の者はセンター（個別）試験英語を満点とする」、「英検2級以上の者は資格レベルに応じてセンター（個別）試験英語の点数に換算する」、「英検2級以上の者は英語試験（個別）を免除する」など。

【加点】「英検2級以上の者は点数化し個別試験の結果に加点する」など。

【判定優遇・合否参考】「英検2級以上の者は合否判定の際に優遇する」など。

次に、英語外部試験の利用方法を国公立大と私立大に分けて調べたものが上のグラフである。両者ともに「出願資格」として受験生の学力の担保に利用していることのほか、「得点換算・試験免除」での活用が多数を占める。得点換算の例として立命館大（法・理工学部を除く）のセンター試験方式では英検準1級以上の資格取得者に対して、センター試験の英語の得点を満点に換算して合否判定を行う（英検のほか TOEFL iBT 71 点以上、IELTS-

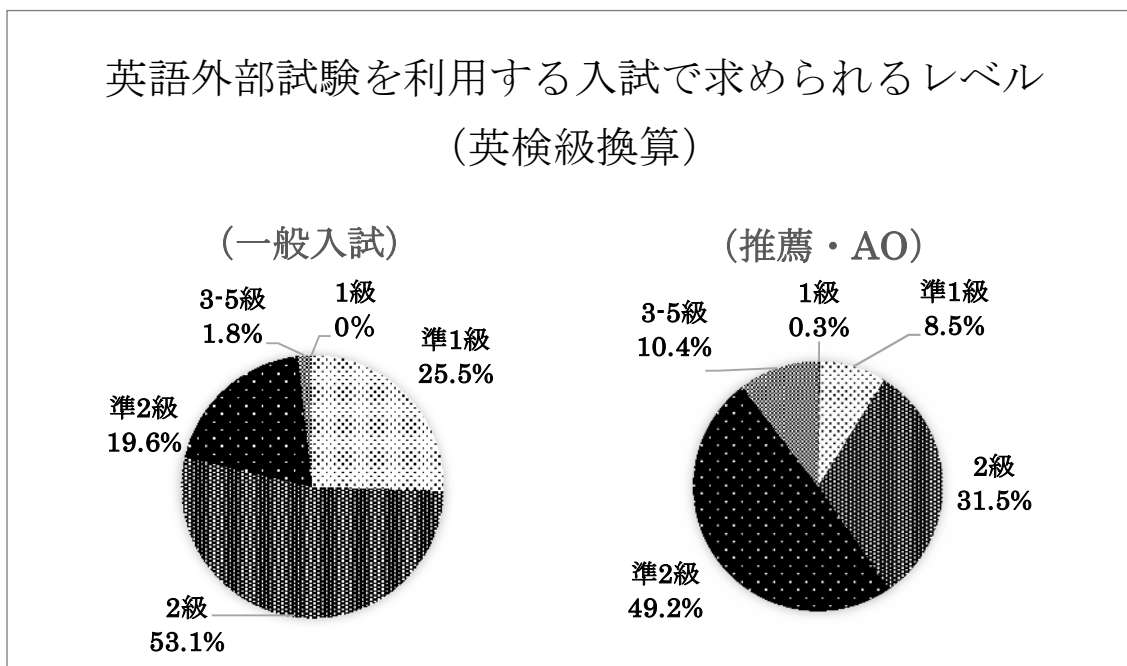
5.5 以上、GTEC CBT-1150 点以上も同様)。立命館大のように満点扱いの級やスコアだけを設定する「みなし満点」の大学の他、例えば「準1級-100点」「2級-90点」「準2級-80点」のように級やスコアを一定の得点に換算する「みなし得点」を設定する大学もある。また中には「英語の試験免除」の大学もある。例えば入試科目が英語、国語、地歴だった場合、大学が指定する級やスコアをクリアしていれば、国語、地歴の2教科で合否判定される。

●受験生と大学、双方にメリットのある英語外部試験利用入試

みなし得点の場合、受験生は志望大学が求める英語外部試験の級やスコアをクリアしておくことで、英語の得点を事前に確保したことになる。大学によってはこのみなし得点に加え、通常の大学独自の英語試験の受験が可能な場合もあり、その得点とみなし得点のうち良い方で合否判定してくれる。また事前のみなし得点確保によって、早い段階に英語の受験勉強を終了し、他教科の勉強に集中することもできる。今までの入試では試験当日に全教科で100%の力を出すことを求められる「一発勝負」であったが、複数回受験チャンスがある英語外部試験では、目標とする級やスコアの取得まで何度かチャレンジすることも可能だ。

大学にとってもこの入試方式を利用することで受験生の英語力を正確に把握し、入学後の学力のミスマッチを避けられることは大きなメリットと言えるだろう。受験生の選抜において学力の比重が高い一般入試では、実力を備えた学生を安定して確保するためにも英語外部試験の利用は有効な入試方式だ。

●一般入試で求められるレベルは推薦・AOと比較して高め。英検2級レベル以上が79%



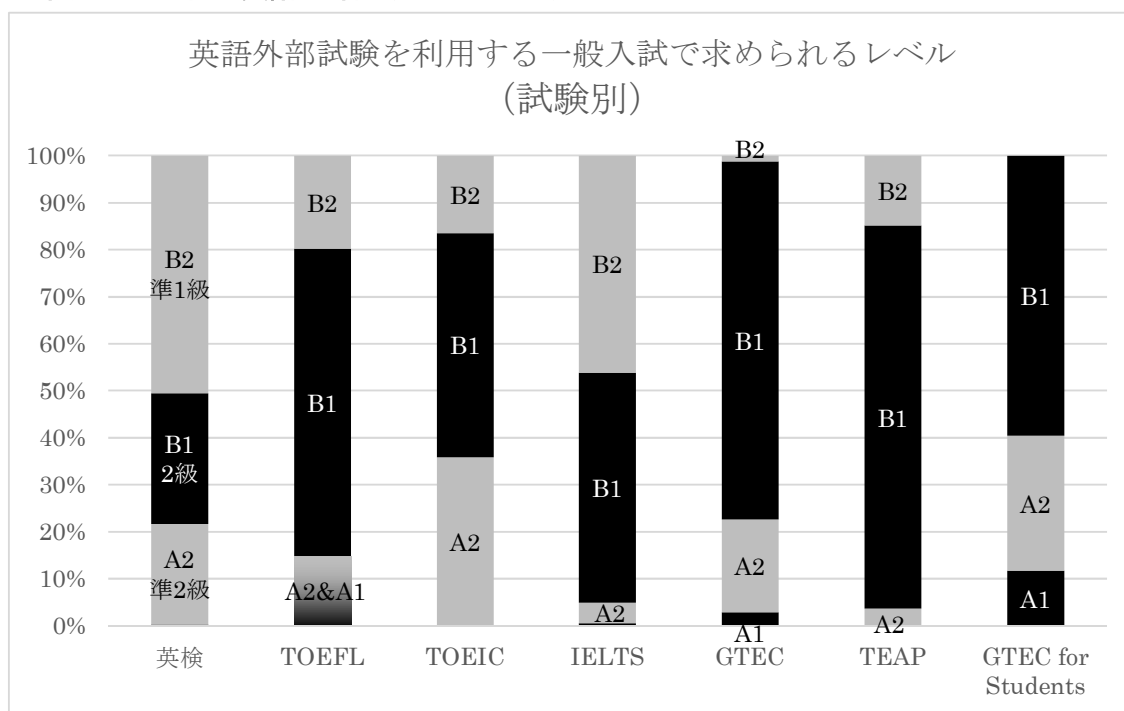
※募集要項の記載に級・スコアの指定が無いものは除く。

各大学の入試にて、英語外部試験で求めているレベルを表したものが上のグラフだ。ここでも【推薦・AO 編】と同様、文部科学省発表のCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）を基

準とした英語外部試験の対照表を使用して試験レベルの統一を行い、英検級に換算した。

一般入試と推薦・AO で求められる英語レベルを比較してみると、一般入試では 2～準 1 級レベルという上位級の割合が非常に大きいものに対して、推薦・AO では高校卒業段階での標準的な英語力と言われる準 2～2 級レベルが多くなっている。推薦・AO では出願資格として利用する大学が多いため、求められる英語レベルは高くはない。一方、学力という限られた側面から入学者を選抜する一般入試では、受験生の優遇には相応の英語力が求められるのは当然のことだろう。

● 推薦・AO 同様に英語外部試験によって利用されるレベルに差



※募集要項の記載に級・スコアの指定が無いものは除く。

ここでは各大学が求めている英語レベルを試験別に注目する。ここでも文部科学省が発表する英語外部試験の対照表を使用し、CEFR レベルで比較を行う。

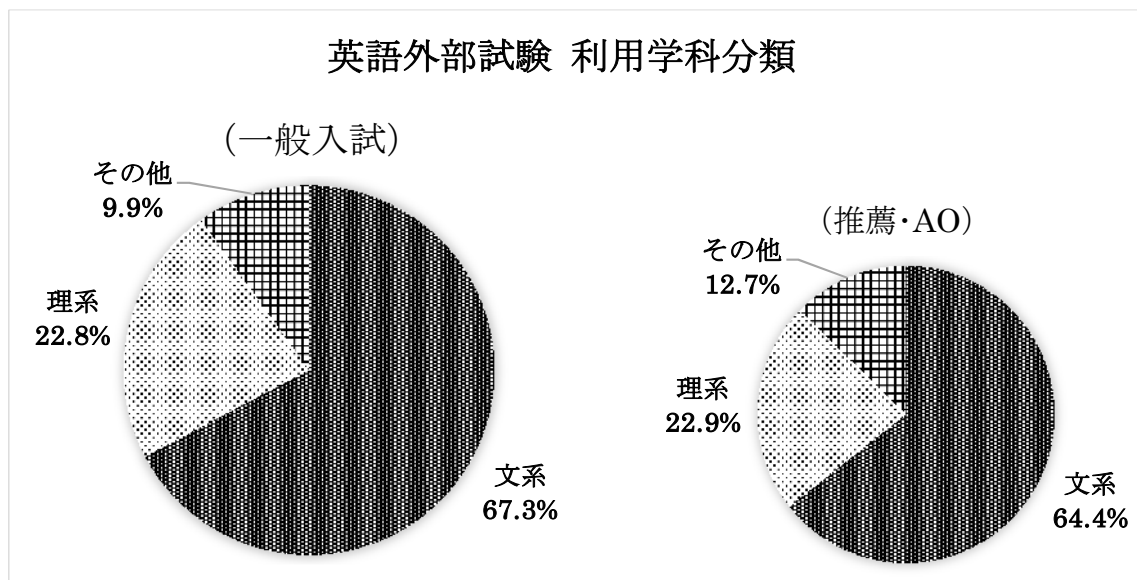
大学が一般入試で求める英語レベルとその件数を試験ごとに集計したものが上のグラフとなる。このグラフからはそれぞれの試験で設定されるレベルに特徴が見られる。大学入試では一般的に CEFR A2～B2 レベルの英語力が求められると言われているが、今回調査した一般入試でそれがバランスよく分布しているのが「英検」「TOEIC」だ。試験によってレベルに上下の振れはあるが、幅広い学力層で英語力認定に活用されていると言える。

「TEAP」はハイレベルな B1 に集中している。これは「TEAP」がまだ実質 2 年目のかなり新しい試験で、これをいち早く採用した大学が上位層に近接していたためだ。日本の大学入試での使用を想定して作られた専用テストである強みを活かして今後、採用大学のレベル幅が広がるにつれ A2、B2 レベルの設定も増えていくと思われる。

各試験とも英語力を測定するという目的は同じであるが、測定できるレベル範囲と判定が不得意なレベル範囲をそれぞれ持ち合わせている。現在文部科学省が発表している CEFR

を基準とする英語外部試験の対照表には多くの試験が掲載されている。各試験においては今後、実際に試験を利用して入学した学生が相応の英語力を身につけているか、大学の期待する能力が測定できているかについても試験の精度が試されるようになるだろう。

●文系学科での利用が67%、推薦・AOも同じ傾向



※各学科は蜚雪時代4月臨時増刊における各大学からのアンケート回答に沿って「文系」「理系」「その他」に分類した。
 ※学科が「文系」「理系」の両方にまたがる場合、両方に計上（例：国際基督教大 教養学部 アーツサイエンス学科）。

ここでは英語外部試験を入試利用している学科の傾向をみるため、全ての学科を「文系」「理系」「その他」の3つに分類し、その割合を算出した。その結果は文系が67%と大半を占め、理系が23%、その他（芸術・体育・教員養成系等）が10%となった。これは上のグラフからもわかるように推薦・AOとほぼ等しい結果である。

このグラフでは理系学科での英語外部試験利用の割合は、文系学科と比較するとまだまだ少ないが、理系学科の中での傾向に注目すると推薦・AOと同様に工学部系統での利用が目立った。このことから工学分野においては専攻内容の習得とともに、英語をツールとして使いこなす能力も重要と考えられていることが推察できる。

●特徴的な利用方法

英語外部試験の一般入試での利用は始まったばかり。各大学はこれをどのように利用して、より多くの有能な学生を確保するか、模索している段階だ。ここでは英語外部試験を利用した特徴的な入試を紹介する。

<上智大学>

今回の記事で注目した TEAP、これを利用する入試を語るうえで外せないのが上智大だ。2016年度の一般入試では国際教養学部を除く全ての学科で「TEAP 利用型」が実施された。ここでは総合グローバル学部 総合グローバル学科の入試を例に利用方法に注目する。

総合グローバル学部 総合グローバル学科 TEAP 利用型

TEAP
260点
(Reading 70点・Listening 60点・Writing 60点・Speaking 60点)

「TEAP 利用型」では上記の点数を出願資格として設定する。基準点を満たした受験生は国語・地歴の2教科の試験結果で合否判定が行われる。4技能を測定する英語外部試験の利用価値として、各技能に基準点を設けることでバランスの取れた英語力を設定できる点があげられる。受験生は合計点とともに各技能の基準点を満たすことが求められる。この「TEAP 利用型」では1度の受験で複数の学科に出願することもできる。上智大の他学科を併願する受験生にとっては、TEAPの基準点を取得することが合格への大きな一歩となるだろう。

<早稲田大学>

早稲田大ー文化構想学部・文学部は2017年度入試より「一般入試（英語4技能テスト利用型）」を導入する。「英語4技能テスト利用型」では大学が指定する英語外部試験の基準点を上回る受験生について（＝出願資格）国語・地歴2教科の合計得点により合否判定される。早稲田大が指定する英語外部試験とその基準点は以下の通りだ。

文化構想学部・文学部 英語4技能テスト利用型

技能	TEAP	IELTS	実用英語技能検定※		TOEFL iBT
			2015年2月～ 2016年3月 受験者	2016年4月以降 受験者 (CSE 2.0)	
総点	280	6	1級/準1級 合格者	2200	60
Reading	65	5		500	14
Listening	65	5		500	14
Writing	65	5		500	14
Speaking	65	5		500	14

※実用英語技能検定：2016年4月以降の受験者は、4技能試験が適用される1級/準1級/2級に限る。

ここで特徴的なのが英検 CSE2.0 を採用した点だ。CSE（Common Scale for English の略称）とは、試験結果を級の合否で判定していた英検にスコアを併記するための尺度である。これにより英検5級から1級までの英語力をさらに詳細なスコアで表示することが可能になった。今までは大学が英検を入試に利用する際、設定するレベルが2級では低すぎ、準1級では高すぎるということがしばしば起こっていた。それがこのCSEを活用することで、大学の希望に沿って細かくレベル設定することができる。技能ごとにスコア表示されるため、合計点と併せて必要な技能に比重を置いたスコア設定も可能となっている。

<明治大学>

明治大ー経営学部でも 2017 年度入試より「英語 4 技能試験活用方式」を導入する。この入試で採用される英語外部試験は以下の 5 つだ。前述の 2 大学と同様、合計点とともに技能ごとの基準点を設け、4 技能のバランスが取れた英語力を求めていることがわかる。明治大の特徴は早稲田大と同じく英検 CSE2.0 を採用している点と、合計点、技能ごとの基準点を 3 段階に分け、それぞれに「出願資格」「加点」を設定している点である。出願資格としての基準点に加え、さらに高い英語力を持つ受験生を優遇したいという大学の意向を伺うことができる。

経営学部 英語 4 技能試験活用方式

①出願および「外国語」試験の免除に必要なスコア（最低点）

試験の種類	総合スコア・級	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検(CSE2.0)	2級検定試験の2200	530	530	530	530
TEAP	230	60	60	45	45
TOEFL iBT	57	13	13	12	12
IELTS	4.5	4.5	4.5	4.0	4.0
TOEIC & TOEIC S&W	980	325	335	140	130
		R&L 680		S&W 280	

②20 点の加算に必要なスコア（最低点）

試験の種類	総合スコア・級	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検(CSE2.0)	準1級検定試験の2310	540	540	540	540
TEAP	260	65	65	50	50
TOEFL iBT	64	14	14	13	13
IELTS	5.0	5.0	5.0	4.5	4.5
TOEIC & TOEIC S&W	1090	375	385	150	140
		R&L 765		S&W 300	

③30 点加算に必要なスコア（最低点）

試験の種類	総合スコア・級	各技能のスコア			
		Reading	Listening	Speaking	Writing
英検(CSE2.0)	準1級検定試験の2550 または1級検定試験合格	610	610	610	610
TEAP	280	70	70	60	60
TOEFL iBT	71	15	15	14	14
IELTS	5.5	5.5	5.5	5.0	5.0
TOEIC & TOEIC S&W	1180	405	415	160	150
		R&L 845		S&W 320	

以上に主だった大学での英語外部試験の入試利用例をあげたが、今後はさらに多くの大学が英語外部試験を入試に導入してくることが予想される。大学が求める学生像に合わせて試験の利用方法を検討し、様々な選抜方法で実施されるようになるだろう。英語外部試験は入試本番前に複数回受験のチャンスがある点、また技能ごとに英語力を測定できる点が最大の特徴である。これを利用した入試が大学、受験生双方にとってメリットのある受験方式として広がっていくことに期待したい。